

令和 5 年 6 月 1 日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K03336

研究課題名(和文) 心理検査開発者オーラルヒストリーによる日本心理検査史

研究課題名(英文) History of Japanese psychological test by oral history of test developers

研究代表者

鈴木 朋子 (suzuki, tomoko)

横浜国立大学・教育学部・教授

研究者番号：60422581

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、心理検査開発者のオーラルヒストリーを収集し、開発者の視点による日本の知能・発達・認知検査史をまとめることを目的とした。研究では、心理検査開発者5名からオーラルヒストリーを収集し、心理検査開発者の視点による日本の検査史を検討した。検査開発者のオーラルヒストリーから、検査開発者の開発への動機と開発者の組織は時代によって変化し、開発の主導者は検査によって異なることが論じられた。さらに、乳幼児健康診査と発達検査の関連を検討し、診療報酬における心理検査の変遷について調査を行った。心理検査は、社会制度の影響によって発展し、社会の変化を反映するものであると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題では、心理検査開発者によるオーラルヒストリーを収集し、公表を行なった。このことにより、多くの研究者にとって利用可能な貴重な資料を提供し、保存することが可能となった。また、オーラルヒストリーを史料として用いて、検査開発者の視点から心理検査史を論じる論文を公表した。文献研究が中心的手法であった心理学史の研究に、オーラルヒストリーという新しい研究手法を提案することができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research project was to collect oral histories of psychological test developers, discuss the history of intelligence testing in Japan from the developers' viewpoints. In this research, oral histories were collected from five psychological test developers, and the history of Japanese testing from the perspective of psychological test developers was examined. From the oral histories of test developers, these were found that the test developers' motivations for development psychological tests and the organization of developers changed over time, and that the leadership of development varied according to the test. In addition, the relationship between infant health checkup and developmental screening test was discussed, and the psychological testing in medical reimbursement was investigated. Psychological testing was considered to have developed under the influence of social institutions and, conversely, to reflect changes in society.

研究分野：臨床心理学

キーワード：心理学史 心理検査 オーラルヒストリー 開発者

1. 研究開始当初の背景

研究を開始した2019年当時、日本では3万5千人以上の臨床心理士が心理的援助を提供していた。加えて、2017(平成29)年の公認心理師法施行により、臨床心理学に対する社会のニーズはさらに増大することが予測され、心理臨床の研究者および実践者は、社会に対する学問と実践の意義を説明する責任が求められると考えられた。

臨床心理学において、心理検査は重要な役割を果たしてきた。心理学史の分野では、心理検査の歴史を論じた研究が複数認められるが、その多くは知能検査を対象としたものであった。乳幼児の能力を測る発達検査、高齢者等の認知機能を測定する認知機能検査は、知能検査と共通する内容が含まれているものの、知能検査と連続したものとして検討されることはなかった。

加えて、既に報告された心理検査史の研究は文献調査が主な研究方法であった。心理検査が社会からの要請を受けて発展してきた経緯を考えると、心理検査開発者によるオーラルヒストリーを収集し、検査開発者の視点から心理検査史を検討する必要があると考えられた。

以上のことから、検査開発者のオーラルヒストリーを含めた、日本の心理検査史を包括的に論じる必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、心理検査開発者のオーラルヒストリーを収集し、開発者の視点による日本の知能・発達・認知検査史をまとめ、心理検査の歴史からみた日本の臨床心理学の特徴を見出すことを目的とした。収集したオーラルヒストリー、研究の過程で得た歴史的な心理検査等の資料は、広く使用できるよう公開することを目標とした。

以上の目的は、研究開発者という新たな観点をを用いた臨床心理学の歴史の考察と、オーラルヒストリーを心理学史研究で展開する試みとなると考えられた。

3. 研究の方法

研究は以下の4点の方法で行った。

(1)心理検査開発者オーラルヒストリーの収集

心理検査開発者5名を対象に半構造化面接にてインタビューを行い、心理検査開発に関するオーラルヒストリーを収集した。インタビュー内容は、研究協力者の経歴(学歴・職歴)、研究協力者が開発に従事した心理検査、研究協力者の「知能観・認知機能観」であった。この心理検査についての項目では、心理検査開発に至った経緯、心理検査に関係する仕事内容、その仕事を行った動機を中心に語ってもらった。インタビューは対面またはオンラインで、複数のインタビューによって行った。一回のインタビューの所要時間は1時間から2時間であった。

(2)心理検査開発者の視点による日本の知能検査史の特徴分析

心理検査開発者オーラルヒストリーに基づいて、日本における知能検査史を検討した。科研費基盤(C)(15K04117)、科研費若手基盤(B)(22730535)で収集したオーラルヒストリーも資料として用いて検討を行った。

(3)乳幼児健康診査の発展からみた発達検査の出現頻度の変遷

オーラルヒストリーに基づき乳幼児健康診査(以下、乳幼児健診)と発達検査の関連を調査した。1954年~2016年に発行された「小児保健研究」378冊(13巻1号~75巻6号)に掲載された論文等を対象に、発達検査または知能検査に関係した用語の出現件数を調査した。加えて、乳幼児健診の歴史について文献調査を行い、乳幼児健診の発展と発達検査の変遷の関連について検討を行った。

(4)診療報酬における心理検査の変遷についての調査

平成18(2006)年度~平成30(2018)年度までの「診療報酬改定に係る通知等について」及び「診療報酬の算定方法の制定等に伴う実施上の留意事項について」を対象に、区分番号(「D283 発達及び知能検査」、「D284 人格検査」、「D285 その他の心理検査」)および操作の容易さ(「1 操作が容易なもの(以下1)」、「2 操作が複雑なもの(以下2)」、「3 操作と処理が極めて複雑なもの(以下3)」)について、各カテゴリーで指定されている心理検査の件数を集計した。さらに、平成30年に指定された検査のうち、2019年4月時点の入手可能性を、心理検査出版社等(千葉テストセンター、サクセス・ベル、三京房、トーヨーフィジカル、京都国際社会福祉センター)のホームページにて調査した。

4. 研究成果

(1)心理検査開発者のオーラルヒストリーの収集

オーラルヒストリーを収集した研究協力者(敬称は略す)は、JART 開発者の松岡恵子、MMSE-J 開発者である杉下守弘、DAM グッドイナフ人物画知能検査日本版開発者である小林重雄、リーディングスパンテストの開発者である心理学者の苅阪満里子、『新訂版田研・田中ビネ 知能検査法』(1970)・『全訂版田中ビネ 知能検査法』(1987)の出版に出版社員として尽力した田研出

Table1

心理検査開発者オーラルヒストリー一覧

開発者	開発した心理検査	インタビュアー	形式
松岡恵子	JART	鈴木朋子, 名取洋典	対面
杉下守弘	MMSE-J, WMS-R	鈴木朋子, 名取洋典, 溝口元	対面
小林重雄	DAM, WAIS-R	鈴木朋子, 高砂美樹, 名取洋典	オンライン
苧阪満里子	リーディングスパンテスト	鈴木朋子, 高砂美樹, 名取洋典	オンライン
高橋徹	田中ビネ (1970), 田中ビネ (1987)	鈴木朋子, 高砂美樹, 名取洋典	オンライン

版株式会社相談役の高橋徹の5名であった。インタビューの一覧をTable1に示す。

録音した音声は、面接協力者の了承を得てテキストに書き起こした。収集したオーラルヒストリーの一部は論文として発表した(鈴木・安齊, 2020; 鈴木・名取, 2021; Suzuki, 2021; 鈴木・名取・高砂, 2023)。オーラルヒストリーの内容の要約を以下に示す。

JART 開発者 松岡恵子のオーラルヒストリー

松岡は、国立精神・神経センターの金吉晴のもとで、NART を参考にして熟字訓の読みから能力を推定する JART を開発した。JART の発表は 2002 年、その後は項目数削減の要望を受けて 2 回の改訂を行い、2006 年に「知的機能の簡易評価実施マニュアル: Japanese Adult Reading Test (JART)」を振興医学出版社より発売した。JART 検査開発時の標準化協力者は、シルバー人材センターに依頼を行い募集した。臨床現場において、JART は病前の能力を推測するために使用されているが、開発者としては、JART は単語読みの知識を測定する検査として慎重に捉えており、高次脳機能障害等の脳外傷を負った人の測定値は病前の能力を示すとはいえないと考えている。

MMSE-J, WMS-R 開発者 杉下守弘のオーラルヒストリー

杉下は、2006 年に国際プロジェクト「アルツハイマー病神経画像戦略」(ADNI) のメンバーとして MMSE 原版と等価な検査として MMSE-J を開発し、2012 年に「精神状態短時間検査 - 改訂日本版 MMSE-J 使用者の手引」を日本文化科学社より発売、2019 年に「精神状態短時間検査-日本版 (MMSE-J) 改訂版」を発売した。MMSE-J は、MMSE 原版と異なる部分を持つ他の MMSE 日本版と違い、国際比較に有用となるよう等価性を重視して開発された検査であり、MMSE 原版の著作権を持つ PAR 社および日本版著作権を持つ日本文化科学社の双方から許可を得た正規の日本版である。MMSE-J 開発の過程で、杉下は日本語では出来ない課題については文化的適応を配慮して削除し、標準化された心理検査に必要とされる妥当性、信頼性、採点基準について検討を行った。さらに、日本における心理検査開発の実践的な問題として、原版の著作権料が高額であるため必要経費が確保しにくく標準化作業が進まないこと、検査開発が研究者としての業績になりにくく検査開発を行う研究者が少ないことが語られた。

DAM, WAIS-R 開発者 小林重雄のオーラルヒストリー

小林は、1962 年頃より DAM の再検討に着手し、1967 年に『グッドイナフ人物画知能検査ハンドブック』を三京房より出版した。その後、子どもの生活の変化や視聴覚文化の変化を考慮して再標準化を行い、2017 年に『DAM グッドイナフ人物画知能検査ハンドブック新版』を出版した。小林は、人間の基本的な部分は変わらないにもかかわらず、風土や時代が変わることで子どもの人物画は変化すると考えている。例えば子どもの視聴覚文化が変化し、アニメが大きな影響を与えるようになったために、子どもの人物画の目玉は縦長に描かれることが一般的になった。このような変化に対応して、DAM の評価基準も改訂が必要とされる。さらに、心理臨床家としての小林は、心理検査は数値を得るためだけに使用するものではなく、数値以上のものを訓練と経験で読み取る必要があると考えている。しかしながら検査結果の数値化は、子どもにかかわる他の専門家等がイメージを持ちやすくなり子どもに関わりやすくなる道具となるため重要であると考えている。

リーディングスパンテスト開発者 苧阪真理子のオーラルヒストリー

苧阪は、1992 年よりリーディングスパンテストの研究を開始した。2002 年にリーディングスパンテストを扱った『ワーキングメモリ: 脳のメモ帳』を出版し、2020 年に高齢者への適用として『高齢者のもの忘れを測る: リーディングスパンテストによるワーキングメモリ評価』を出版した。苧阪によると、リーディングスパンテストは一般的な記憶力ではなく、ワーキングメモリを測定する検査である。リーディングスパンテストを高齢者や子供に実施して誤答を分析すると、高齢者や子どもは文の一部に注意を向けて取り出すことが苦手であることが理解される。リーディングスパンテスト遂行時の脳活動の研究から、ワーキングメモリには注意の制御機能が重要な役割を果たしていると考えている。リーディングスパンテストは、現在は言語聴覚士のなかで普及しつつある。苧阪は心理検査の臨床的利用よりも、どのような脳の機能があるかを解明し、その脳の機能がどのように検査の成績に影響しているかに関心を抱いている。

田中ビネー開発者 高橋徹のオーラルヒストリー

高橋は、1959 年に田中教育研究所へ研究員として就職、1965 年より田研出版の出版社員として勤め、『新訂版田研・田中ビネー知能検査法』(1970)、『全訂版田中ビネー知能検査法』(1987)

の出版に尽力した。鈴木清が田中教育研究所の所長を務めた時代に、「精神健康度検査」「向性検査」「非行傾向検査」の作成にも携わった。『新訂版田研・田中ビネー知能検査法』の標準化作業では、特殊学級が設置された時代であり、教育界のニーズもあり、入級を検討するために田中研究所のテスターが検査を担当する機会が多くあった。

(2)心理検査開発者の視点による日本の知能検査史の特徴分析

心理検査開発者オーラルヒストリーから日本における知能検査史を検討し、Japanese Psychological Research 誌に発表した (Suzuki, 2021)。分析の対象は、科研費基盤 (C) (15K04117)、科研費若手基盤 (B) (22730535) で収集した、WISC・WAIS・WISC-R・WAIS-R の日本版を開発した品川不二郎、WAIS を開発した山中克夫、「全訂版田中ビネー知能検査」(1987) / 「田中ビネー知能検査」(2003)を開発した大川一郎・中村淳子、『改訂版・鈴木ビネー知能検査』を出版した古市出版の古市龍雄、日本版 K-ABC・日本版 KABC- の開発を行った石隈利紀、日本版 KABC- を開発した服部環のオーラルヒストリーであった。

Japanese Psychological Research に掲載された論文、History of psychological testing from the perspective of test developers in Japan の内容は以下であった。

心理検査の歴史に関する研究は国内外で報告されてきたが、それらの研究は文献調査に基づいている。心理検査が臨床的要請および社会的要請に応じて開発され改訂されることを考慮すると、要請を受けて作業に取り組む検査開発者の姿勢を検討することが必要である。そこでこの論文では、検査開発者が知能検査の開発という仕事をどのように体験したかを 7 名の検査開発者のオーラルヒストリーから分析し、心理検査開発者の視点による知能検査史を検討した。論文では海外および日本における知能検査史について紹介したうえで、7 名の検査開発者の略歴を示し、各開発者が知能検査の開発に従事した理由と、検査開発の過程について語る部分をオーラルヒストリーから抜粋して示した。これらのオーラルヒストリーから次の 3 点が考察された。第 1 に、開発の動機が世代によって変化したことである。第 2 次世界大戦後まもなく WISC・WAIS を日本に導入した品川、カウフマンに直接師事し K-ABC を日本に導入した石隈といった検査導入世代の開発者は、新しい知能検査を日本に導入するという熱意が検査開発の動機となった。後の検査改訂の世代である山中、服部、大川・中村は、検査開発を職業上の責任として捉えており、世代による動機の違いがあることが理解された。第 2 に、時代によって検査開発者の組織が変化したことが特徴として考察された。1950 年代の品川は少人数の仲間による共同作業によって開発を行ったが、2000 年代以降の山中、服部は専門家集団による大規模で組織的なプロジェクトとして検査開発を体験した。第 3 に、心理検査開発の主導者が検査によって異なることが見出された。品川のオーラルヒストリーでは、心理検査開発が研究者主導の開発から出版社主導の開発へ変化したことが語られた。石隈は、研究者が主体となって開発を行い出版社がユーザーに便利なツールを作るという産学共同の取り組みとして心理検査の開発作業を位置付けた。大川と中村は、研究所が主導して田中ビネーの改訂を行い、研究所のなかで開発作業が継承されていると述べた。以上のように、検査開発の動機の変化、開発者組織の変化、検査開発の主導が検査により異なることがオーラルヒストリーから理解された。加えて、検査開発作業の現代的な課題として、個人情報保護を重視する社会的な風潮により標準化協力者の獲得が困難になっていること、心理検査開発者の後継者の獲得が困難になっていることが示された。これらの検査開発者の姿勢や組織の変化、検査開発における現代的な課題は、オーラルヒストリーによる開発者の視点からの検討によって初めて得られたものと結論された。

(3)学術誌における発達検査の出現頻度の調査

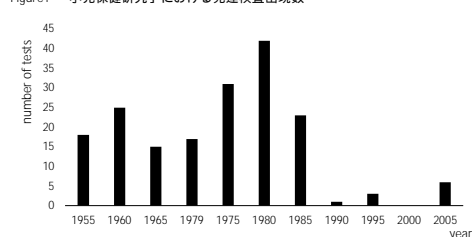
オーラルヒストリーの語りに基づき、乳幼児健診と発達検査の関連について検討を行った。「小児保健研究」1954 年以降を対象に、発達検査の出現頻度調査を行い、2019 年 ESHHS で、Growth of Developmental Tests after the Second World War in Japan の題目で発表を行った。関連の発表として、「心理学史・心理学論」20 / 21 巻掲載の「乳幼児健康診査と母子手帳制度の発展」(鈴木, 2020)、2020 年 2 月開催の心理学史研究会の報告がある。これらの発表の要約は以下である。

日本における乳幼児健診は、1939 年に開始された。第二次世界大戦後、1947 年に児童福祉法が交付され、一般の児童の健全育成を目指す母子保健の取り組みが始まった。1961 年、児童福祉法一部改正に伴い 3 歳児健康診査が保健所で開始された。1965 年、母子保健法が公布され、1973 年に 3~6 カ月、9~11 カ月の乳児一般健康診査を医療機関で行うことが制度化された。

Table 2
「小児保健研究」上の発達検査 (出現回数10以上)

検査名	著者	出版年	出現回数
日本版デンバー式発達スクリーニング検査	上田礼子	1980	36
津守・稲毛式乳幼児精神発達診断法 (津守式)	津守真・稲毛教子 (0~3歳)	1961/1965	25
	津守誠・磯部恵子 (3~7歳)		
MCCペーテスト	古賀行義編	1967	22
新版K式発達検査	嶋津峯真・生澤雅夫・中瀬惇	1980	19
愛育研究所 乳幼児精神発達検査 (牛島式)	牛島義友・木田市治・森脇要 入澤壽夫	1939	16
発達診断	Gesell & Amatruda	1941	15
乳幼児分析的発達検査法	遠城寺宗徳・合屋長英	1960	15
田中ビネー知能検査法	田中寛一	1947	15
鈴木ビネー式知能検査法	鈴木治太郎	1939	11

Figure1 「小児保健研究」における発達検査出現数



1977年には1歳半健診が市町村で開始され、1987年から1歳6カ月精神発達精密健診が市町村で追加された。1933年に小児保健学会により創刊された「小児保健研究」は日本の小児保健の発展に重要な役割を担った学術雑誌である。研究では、1954年～2016年に発行された378冊（13巻1号～75巻6号）に掲載された2000本以上の論文等を対象に、発達検査または知能検査に関係した用語の出現件数を調査した。10回以上出現した検査名をTable2、検査数の変遷をFigure1に示した。Table2、Figure1から、第1の発達検査のピークは1960年前後にあると考察された。この時期に出現した検査は、愛育研究所乳幼児精神発達検査（牛島式）（1939）とゲゼルの発達診断（1941）が主であった。第2の発達検査のピークは1980年前後にあると考えられた。この時期の検査は、日本版デンバー式発達スクリーニング検査（1980）とMCCベビータスト（1967）が主であった。1947年児童福祉法、1965年母子保健法の制定に伴う、1961年3歳児健診、1977年1歳半健診が検査の普及の後押しとなったと考えられた。

（4）診療報酬における心理検査の変遷についての調査

医科診療報酬における心理検査の変遷および心理検査出版社での販売状況について調査を行い、日本心理学会で「診療報酬における心理検査の変遷」（鈴木・名取、2019）、ICPでGrowth of cognitive examination for dementia accompanied legislation in Japan（Suzuki & Takasuna, 2021）として発表を行った。発表の要約は以下である。

診療報酬は、1927年の健康保険法施行に伴い、各都道府県医師会が独自に公定料金を規定したことに始まる。「臨床心理・神経心理検査」は、厚生労働省保険局医療課長による「診療報酬の算定方法の一部改正に伴う実施上の留意事項について」にて通知される。平成18（2006）年度～平成30（2018）年度までの「診療報酬改定に係る通知等について」及び「診療報酬の算定方法の制定等に伴う実施上の留意事項について」を対象に、区分番号（「D283 発達及び知能検査」、「D284 人格検査」、「D285 その他の心理検査」）および操作の容易さ（「1 操作が容易なもの（以下1）」、「2 操作が複雑なもの（以下2）」、「3 操作と処理が極めて複雑なもの（以下3）」）について、心理検査の件数を集計した。さらに、平成30（2018）年に指定された検査のうち、2019年4月時点の入手可能性を、心理検査出版社等（千葉テストセンター、サクセス・ベル、三京房、トーヨーフィジカル、京都国際社会福祉センター）のホームページにて調査した。Table3に集計結果を示す。「D283 発達及び知能検査」は、平成22（2010）年に2件、平成24（2012）年以降は新たに3が設定されてウェクスラー式知能検査3件が指定され、平成26（2014）年にはベイリー発達検査が指定された。デンバー式、ベイリーを除く検査が心理検査出版社等より入手可能であった。「D284 人格検査」は、平成18（2006）年以降、指定の検査に変更がない。標準化作業中の16P-F、PTSD臨床診断面接尺度のCAPS以外の心理検査は入手可能であった。「D285 その他の心理検査」は、平成20年に「認知機能検査その他の心理検査」と区分の名称変更に伴い、1で5件、2で3件、3で1件の心理検査が追加され、以後件数は漸増している。検査内容をみると、平成20（2008）年追加分はSIBやADAS等の認知症の重症度評価、平成22（2010）年追加分は標準高次動作性検査等の高次脳機能障害の検査、平成24（2012）年以降は発達障害（ASD、ADHD）の検査、児童の精神症状（抑うつ、強迫、不安、解離）の尺度が指定され、平成30（2018）年にはHDS-R、MMSEの軽度認知症検査が算定可能と改定された。以上の指定された検査の変遷からは、発達障害、認知症、高次脳機能障害、児童の精神症状に関する問題が指定の時期に重視されたことがうかがえる。診療報酬に指定される心理検査が社会の変化を反映する一方で、標準化作業や普及が伴わず、入手困難な検査が含まれているのは課題と考えられた。

<引用文献>

鈴木 朋子・安齋 順子（2020）. 日本版 KABC- 開発における統計作業の実際：服部環へのインタビューから、横浜国立大学教育学部紀要 | 教育科学, 3, 93-111, doi/10.18880/00013141

鈴木 朋子・名取 洋典（2021）. 漢字の読み能力から知能を推測する試み JART 開発者・松岡恵子へのインタビューから、横浜国立大学教育学部紀要 | 教育科学, 4, 110-126, doi/10.18880/00013726

Suzuki Tomoko（2021）. History of psychological testing from the perspective of test developers in Japan. Japanese Psychological Research, 63, 340-354, 10.1111/jpr.12361

鈴木 朋子・名取 洋典・高砂 美樹（2023）. 子どもが描く人物画の変遷：DAM グッドイナフ人物画知能検査日本版開発者・小林重雄へのインタビューから、横浜国立大学教育学部紀要 | 教育科学, 6, 134-154, doi/10.18880/00015041

Tomoko Suzuki, Miki Takasuna（2021）. Growth of cognitive examination for dementia accompanied legislation in Japan, ICP2020.

Tomoko Suzuki（2019）. Growth of Developmental Tests after the Second World War in Japan. European Society for the History of the Human Sciences.

Table 3
「診療報酬の算定方法の一部改正に伴う実施上の留意事項」で指定された心理検査の件数

区分番号		改定年						
		平成18年	平成20年	平成22年	平成24年	平成26年	平成28年	平成30年
D283	1 ^a	11	11	11	11	11	11	11 (10)
発達及び知能検査	2 ^b	11	11	12	10	11	11	11 (10)
	3 ^c	0	0	0	3	3	3	3 (3)
D284	1 ^a	5	5	5	5	5	5	5 (5)
人格検査	2 ^b	10	10	10	10	10	10	10 (8)
	3 ^c	4	4	4	4	4	4	4 (3)
D285	1 ^a	15	20	20	21	28	28	36 (19)
その他の心理検査	2 ^b	7	10	10	10	10	10	10 (9)
	3 ^c	7	8	8	14	15	16	17 (15)

注) a:1操作が容易なもの 80点、b:2操作が複雑なもの 280点、c:3操作と処理が極めて複雑なもの 450点。
d:平成20年に「認知機能検査その他の心理検査」と名称変更。
Note. 平成30年の括弧内の数字は平成31年4月の時点で出版社から入手可能な検査の件数。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 鈴木朋子, 安齋順子	4. 巻 5
2. 論文標題 K-ABCと学校心理学, カウフマンから継いだもの: 石隈利紀へのインタビューから	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 横浜国立大学教育学部紀要. 1, 教育科学	6. 最初と最後の頁 110-126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Suzuki Tomoko	4. 巻 63
2. 論文標題 History of Psychological Testing from the Perspective of Test Developers in Japan ¹	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Japanese Psychological Research	6. 最初と最後の頁 340 ~ 354
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/jpr.12361	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木朋子・名取洋典	4. 巻 4
2. 論文標題 漢字の読み能力から知能を推測する試み JART 開発者・松岡恵子へのインタビューから	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 横浜国立大学教育学部紀要. 1, 教育科学	6. 最初と最後の頁 110-126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18880/00013726	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木朋子・安齋順子	4. 巻 3
2. 論文標題 日本版KABC開発における統計作業の実際: 服部環へのインタビューから	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 横浜国立大学教育学部紀要1, 教育科学	6. 最初と最後の頁 93-111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 鈴木朋子
2. 発表標題 遠城寺式乳幼児分析的発達検査法の背景
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Tomoko Suzuki, Miki Takasuna
2. 発表標題 Growth of Cognitive Examination for dementia accompanied legislation in Japan
3. 学会等名 ICP2020+（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Tomoko Suzuki
2. 発表標題 Growth of Developmental Tests after the Second World War in Japan
3. 学会等名 European Society for the History of the Human Sciences（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木朋子・名取洋典
2. 発表標題 診療報酬における心理検査の変遷
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	田村 直良 (tamura naoyoshi) (20179906)	横浜国立大学・大学院環境情報研究院・教授 (12701)	
研究 分担者	高砂 美樹 (takasuna miki) (40261763)	東京国際大学・人間社会学部・教授 (32402)	
研究 分担者	名取 洋典 (natori hironori) (80708991)	医療創生大学・教養学部・准教授 (31603)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------